

駄目だ」と言つて海に飛び込んだ者もいました。

私も何とか生を得て台湾に上陸し、独立歩兵第四六八大隊に転属となりました。このような戦況のため、我が部隊は目的のフィリピンには行けなかつたのです。

その後、南方の島々は玉砕の悲報が相次ぎ、ついに昭和二十年八月十五日の終戦の日を迎えたのです。中国兵が来て武装解除をされ、その後、捕虜生活となり、昭和二十一年三月二十三日、復員船にて久里浜に上陸、各自に帰省することになりました。

新潟の街並は空襲でやられました、実家は無事でしたので、家族からは喜びいっぱいのお出迎えを受けました。しばらく休養した後、元の理髪業を開業、今日に至っております。現在の平和な六十余年、さらに永久に続けてもらいたいと願っております。

両親もいないのに三度も召集

新潟県 平 沢 貞三郎

私は昭和十二（一九三七）年の徴兵検査で第一乙種合格でした。昭和十三年九月十三日、第一回目の召集令状が来ました。令状が配達された時、家の者は山へ仕事に行っており、家には誰もおりませんでした。家族は私への連絡を心配しておりましたが、私には他の者が知らせてくれ、当日家族も駅で私の姿を見て安心したようでした。

当時、私は小学生の時に父親も母親も亡くして、八十歳を越した祖母と小学生の弟二人の四人家族で、私が働いてやつと生活していた状況でしたので、その家族を残して出征することは私にしては断腸の思いでした。しかし当時としては国家のためとなれば、個人のいかなる理由も通用しない時代でしたので、心を鬼にして入隊しなければならず、親戚はもちろん、知人、友人などの方々には後

のことをお願いして小千谷駅から汽車に乗りました。しかしいくら考えても、老祖母のことやまだ幼い弟たちのことは頭から離れることはありませんでした。

高田駅で下車しますと古参兵たちが道案内に数人出ており、高田歩兵第三十連隊第八中隊に入隊しました。中隊長は高木中尉殿、第五分隊長は中川伍長殿で、三十人ほどの班でした。二年兵は何人もいないようなので初年兵にとっては有り難かった気がしました。

第一期教育が始まって、大きな声で気合を入れられても、負けずに大きな声で元気よく行動すると、自分でも元気が出てきますので一生懸命に行動しました。一日も早く二年兵の名前を覚えるようにも努力しました。家のことは心配するなどと言われても忘れることなく出来ず、一日一日、時の過ぎるのを待つしかなく、心身共に疲れしました。

とくに私の場合には、入隊前に青年学校にも行けない状況でしたので、銃剣術や教練など、人一倍

欲張って頑張りました。このため班長殿にも何かと目を掛けて頂きました。

昭和十三年十一月十日、関山演習場において一期検閲があり、中隊の代表三人の中に私も選ばれました。射撃やその他の訓練を師団長の前で行う任務でしたが見事に合格して一期検閲が終わりまりました。

昭和十三年十一月十七日、満州の本隊で再教育する兵の代表が発表され、中隊から選ばれた七人の中にも私の名前がありました。中隊から外地へ行く一番早い人員です。近日中に出発するため家族との面会を連絡する者もおりましたが、私はかえって未練が残ると思いい家族には連絡しませんでした。二度と会えないかも知れないという思いと、幼い時に父母と別れた弟たちが不憫ふびんでしたが涙をこらえて知らせなかったのです。

十一月二十五日、早朝の出発でしたが、町の人たちが多数、高田駅まで日の丸の小旗を振って見送ってくれました。新潟に着いて一泊し、翌日船

での出航ですが、風が強くなり午後になりました。五千トンの船でしたがひどく揺れました。佐渡沖を通る時は明りが見えて郷愁を誘われました。これも見納めかと思いがらの通過でした。

海が荒れたために出航が一日遅れましたが無事に北朝鮮の羅津港に到着、汽車で鮮満国境を通過して、満州の牡丹江の穆稜に到着したのは夜になってからでした。昭和十三年十二月一日、柏部隊第八中隊、隊長古木中尉、田中中尉の部隊でした。

翌朝の点呼にマゴマゴしている初年兵は全員ピントを張られてピリピリするような空気でした。それから四カ月の再教育で徹底的にしぼられることとなりました。

中隊長に一言挨拶して隊長室に入ると、田中中尉が「昨夜、初年兵が入って来たが、まだ実戦の役に立ちそうもないから、いくらなぐつても良いが、一日も早く一人前の兵隊になるようにやつてもらいたい」と命ぜられました。同じ日本の軍隊でもこんなに教育方針が違うものかと驚きました。内地

では私的制裁は絶対しないように厳しく言われていた時ですから、いつ戦場になるか分からない外地だから止むを得ないのかと思ったりもしました。柏部隊到着二日目の朝の点呼で、後に並んだ者は全員週番下士官にピントをもらいました。早く並ぼうと起床ラッパより早く起きるのを見つかれば、またピントです。どっちにしてもなぐられませんが、みんな馴れるにつれて動作はきびきびと早くなり、なぐられないようになります。

十二月に入ると氷点下二〇度を越す寒さとなり、歩哨に立っていても足踏みでもしていないと凍傷になります。歩哨勤務や不寝番勤務の時は銃に実弾を込めて立番をしているので緊張してピリピリです。中隊に小学校の同級生の兄が下士官になって勤務しておりましたので、何かと助けてもらいました。

満州は大陸気候と言って大きく区分すると、冬から夏になり、夏から冬になる。日本のように春と秋がないのと同じで、四月になると夏のように

暑い。昭和十四年四月に入ると、我々仲間が内地へ帰れるという話が出ましたが、有頂天になると、またビンタを食うような気がして行動には充分気をつけておりました。関東軍の教育ではよくなくられました。その関東軍第三十連隊の教育も二期目が終わって、内地の高田へ戻れることになりました。

昭和十四年四月末のことです。その時の嬉しさは言葉や筆で表わすことはできません。四月二十八日、満州穆稜発、鉄道も客車で帰れることになりました。今度は一番運が良かったように思えました。本当に人の気持ちは分らないものです。

新潟の高田へ帰隊して見ると、前年九月に一緒に入隊した他の者は、みんな中支の戦場へ出陣しておりました。その中には遺骨となって帰って来るものがぼつぼつ出て来ました。つくづく人の世の無情を感じさせられました。

高田連隊に帰隊してからは新兵教育等に勤務しておりましたが、高田は冬になると積雪が二メー

トルから多い時は三メートルにもなり、雪中行軍等には教官も大変でした。教育が終了した新兵は次々と戦地へ動員されて行きました。するとまた次の新兵教育でした。初めて入隊した時の自分の姿を見るような気がして、とても新兵を殴ることは出来ませんでした。

昭和十四年五月になって師団経理部の検査が行われることになり、準備作業のため「各隊より名前を呼ばれた者は本部前に集合して、経理委員の指揮下に入れ」との命令を受けて、私も本部前に集合しました。経理委員は中尉でした。集合したのは全員一等兵でしたので、中尉の近くにいた私を見て「これからはお前が全員の指揮を取れ」と命ぜられました。土曜日になって、他の兵から明日の日曜は休んでも良いからと言われたので中尉殿に伺ったら「検査前に休みなど無い。そのかわり代休をやるから」と約束してくれました。

検査も済んで倉庫の整理も一段落したので、中尉殿に代休をお願いしたら「駄目だ、とみんなに伝

えておけ」と言われました。約束していたので中尉殿から皆に話して下さいと申し上げたら「貴様、上官の命令が聞けないのか」と怒って部屋に入られてしまいました。駄目だと思つて班へ帰りますと、その後の中隊へ通報が来て、第八中隊の平沢一等兵は上官の命令に従わず帰つたので処罰されたい、との通報があつたとのことです。

その件で中隊長室へ来いと班長を通して言われましたので中隊長室へ行きますと「平沢、何の用でお前を呼んだか分るか」「はい」「俺がこのまま本部の通報通りに判をついたらどんなことになると思うか。お前がこれまで地方でどんなことをやって来たか、今回のことで八方手をつくして調べた結果、判はつかないことにした。しかし營倉入りの話まで出たのだから無罪というわけにも行かない。今日は中隊で謹慎とするぐらいで我慢してくれ」と笑顔で話されました。

「しかし何のトガメも無いのではなあ。通報を出した人のことも考えてのことではなあ」と言われ

ました。種々の人のことを考えておられる立派な中隊長の下で働ける喜びを感じました。あとで聞いた話ですが、私のために一生懸命調べて下さつたとのことでした。高木中隊長の温情あふれる措置によつて罪人にならずにすみました。

昭和十五年八月三十一日、召集解除になる時は伍長勤務上等兵として下士官適任証を公布され、小千谷の実家に帰りましたが、この時、高田歩兵第三十連隊に残つた兵は千島列島のアツツ島守備に動員されて全員が玉砕となりました。

昭和十六年七月十五日、第二回目の召集令状が来て高田歩兵第三十連隊へ再入隊しました。すぐに戦闘服が支給されて出発となり準備に忙しい思いをしました。二、三日経て大阪から船で釜山へ行き、貨車で北上し、北朝鮮の雄基に到着し、重砲隊の砲廠を借りて、九月末まで駐留しました。

すぐ近くが満ソ国境なので、歩哨を立てて警備しておりました。約一カ月して羅南に移動し、毎日訓練に訓練を重ねてソ連軍の攻撃に備えました。

昭和十七年二月十一日、羅南から五十キロほど南方の人里離れた山の中で紀元節を迎えましたが、もちろん式典も何もなく、山奥ですので世の中のこととは何も分りません。そこでラジオニュースぐらいいは聞きたいと、皆で金を出し合ってラジオを一台設置しました。早速スイッチを入れますと紀元節でした。そしてシンガポール陥落のニュースで湧き上っております。しかしこれから戦局はどうなるだろう、我々の当面の敵はソ連だが、新兵器は何も無い。三八式歩兵銃で何が出来るか、勝算は無いと思っても軍隊では何も言えない。戦争に負ける話はタブーなのです。

昭和十七年十一月中旬ごろになって、一部召集解除の噂が流れ、私には関係ないと思っておりますが、召集期間の長い者からと言うことで、私が該当することになりました。初めから現役兵と一緒にだったので、現役と思っていた期間も召集期間だったのです。

召集解除となりましたが、人事係から「経理部

に任官させるから残ってくれ」と言われました。そして郷里には、まだ老祖母と学生の二人の弟が人様のお世話になっていたので、何とか除隊をお願いしたいともうしあげたら「よし分かった」と召集解除に同意してくれました。

帰る段になったら人事係の准尉から「帰途回り道になってすまないが、名古屋憲兵隊の佐藤芳政氏に書類を届けてくれないか。大事な書類だから必ず本人に渡してもらいたい」と言うことで、昭和十七年十一月末ごろ、汽車で釜山へ行き、下関から名古屋へ行つて本人に渡しました。ついでに体格が同じぐらいだったので、佐藤さんの憲兵服を借りて一緒に名古屋見物をさせて頂き、自宅に帰りました。

翌日から長い間留守にしていた工場の中の整理や、今後のことについて知人に相談したりしておりましたところ、後日参議院議員として活躍された西川氏が旧工場を見て「仕事を終わった工場で、これほど機械などの手入れの良い工場は初めて見

た」と感心されて隣町の自社の協力工場に勤務しながら準備を進めることになりました。

昭和十九年二月、工場で午後の仕事に取りかかったところへ電話が来て、出て見ると町役場の兵事係から「今日中に新発田歩兵隊に入隊するように」と言う、第三回目の召集令でした。

私は慌てて「無茶は言わないで下さい」と言ったら「いつまでなら入れるか」と言うので、「明日の夜中です。それより早くは駄目です」と言う。「それで良いからお願いします」と言われました。

昭和十九年二月八日、第三回目の召集で、雪中を夜中遅く、新発田の歩兵第十六連隊留守隊に入隊しました。翌日全員集合で、重装備の点検が始まりました。連隊副官が大きな声で「本部一人多いようでもう一度調べるからしっぴかり並んでおれ」と言いながら名簿片手に回って来ました。私ももうひとりの兵に「どっちが現役だ」と聞きますので別の兵隊が「自分が現役であります」と答えました。副官が「よし決まった。召集は直ぐ服を

脱げ」の一声で、慌ただしかったです。私は「動員されずに済みました。」

四月になって「師団の經理検査があるので、遺漏の無いよう頑張ってもらいたい」との訓示がありました。その時、私は主計伍長に進級していましたが証書による員数合わせの主計伍長で、主計教育も受けていないのでにわか勉強で押し通すより方法は無いと覚悟を決めていました。検査当日現役伍長が大変な事故を起してしまったと言って主計中尉が慌てるので、話を聞きますと「お前がやれ」と言うのです。私は「新品伍長で分りません」と断りましたが「何とか言い訳を考えろ」と言い立ち去ってしまいました。

問題の倉庫へ行き、そこにいる数人の兵隊に「○号倉庫の残品を十分間で他へ運び出して空にして置け」と命じ、經理部長の所へ行き「部長殿、今朝私が○号倉庫を見た時はあそこは空でした。何かの間違いではありませんか。もう一度私と一緒に見て下さい」と嘆願しますと「間違いないか」と

何度も念を押されました。私はその都度、「間違いないありません」と答え、「よろしい」と言うので安心して帰りました。翌日、連隊長室へ呼ばれて「良くやつてくれた」と軍旗の写真等を頂き、任官二カ月で伍長から軍曹へ異例の進級でした。仕方なくやったことですが後味の悪い昇進でした。

昭和十九年七月三十日、師団から電話で、南京から經理下士官の欠員があるので行ってくれとの命を受けました。しかし連隊長が「平沢は出すな」と言われたので駄目だと言って南京行きは中止となりました。

昭和十九年八月二十五日、再び師団司令部からの電話で、「フィリピン・マニラで、經理部員一人欠員なので平沢行ってくれ」と言うので承知しますと、また副官が来て「今、手続き取って来たから平沢は残ってくれ」と言われ再び残ることになりました。

九月ごろになって新しい師団を作る話が出て、同僚の渡辺曹長が新しい師団に行くように言われ

ました。しかし曹長はガダルカナル帰りで体調が悪く困っている様子でしたので私が代りますと言いましたがこれも実現しませんでした。

昭和十九年九月末、新しい勤務地石巻市へ移動しました。戦局は最終局面の様相を呈しておりました。經理としては酒保品も豊富に準備してもらえたので感謝しながら勤務しておりました。そして本土防衛部隊として米軍上陸に備えて毎日陣地構築が主たる任務でした。週に二、三回仙台の師団本部や經理部へ出かけ、食品納入業者への連絡や要請、市民と一日交替で行う兵隊の入浴に使う薪の購入など、いろいろな雑用に苦労しました。

昭和二十年四月には宮城県藤尾村へ移動し、連隊本部も石巻から角田町へ移動、宮城県立蚕業試験場の一室を借りて事務室としました。私たちも宮城県亘理町へ移動してここでついに敗戦を迎えました。最後の駐屯地となった亘理町では、經理部は町民の倉庫や物置をお借りして物品を保管していたのですが、終戦となったら将校が、責任者

の下士官の目を盗んで物品を持ち出すので、将校が持ち出すようなら、兵隊にも出来るだけ多く持たせるようにしますと、将校団から訴えると大問題になりましたが話は立ち消えとなって終わったようでした。

糧秣係の将校が「おい平沢、お前に新車のトラックを一台やるから米でも味噌でもいっぱい積んで帰らんか」と言われましたが、身につけていた物だけで復員しました。家に帰ってしばらくしてから小千谷警察から署員が二人来て家の中を調べたいとのことでしたが、私のいた連隊本部に私を良く知っていた本部付衛生兵の方に聞いて下さい。それでも調べる必要があったら、また来て下さいと言って帰しましたが、その後は来ませんでした。後で聞いた話では将校で処罰された方もいたそうです。家に帰った時は妻と二人の子供が待っていてくれました。

弟は二人共まだ帰っておりませんでした。昭和二十年十二月と昭和二十一年に順次復員してきま

した。食料も衣料も仕事も無く数年はどん底生活でしたが、だんだん国民生活も向上してきました。そして皆さんの努力によって六十年を越す平和な社会ができました。私もお陰で地区民生委員等を二十四年間も務め、それなりに地域でも人望を得ることの出来た人生であったと思いつながら、余生を楽しんでおります。